

## 第2問

次の文章は、原民喜「駭」(一九四八年発表)の一節である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

私は一九四四年の秋に妻を喪ったが、ごく少数の知己へ送った死亡通知のほかに、満洲にいる魚芳へも端書を差出しておい  
た。妻を喪った私は悔み状が来るたびに、丁寧に読み返し仏壇のほとりに供えておいた。紋切型の悔み状であっても、それには  
それでまた喪にいるものの心を鎮めてくれるものがあつた。本土空襲も漸く切迫しかかつた頃のこと、出した死亡通知に何の  
返事も来ないものもあつた。出した筈の通知にまだ返信が来ないという些細なことも、私にとっては時折気に掛るのであつた  
が、妻の死を知つて、ほんとうに悲しみを頒つてくれるだろうとおもえた川瀬成吉からもどうしたものか、何の返事もなかつ  
た。

私は妻の遺骨を郷里の墓地に納めると、再び棲みなれた千葉の借家に立帰り、そこで四十九日を迎えた。輸送船の船長をして  
いた妻の義兄が台湾沖で沈んだということをきいたのもその頃である。サイレンはもう頻々と鳴り唸つていた。A そうした、  
暗い、望みのない明け暮れにも、私は凝と蹲つたまま、妻と一緒にすごした月日を回想することが多かつた。その年も暮れよ  
うとする、底冷えの重苦しい、曇つた朝、一通の封書が私のところに舞込んだ。差出人は新潟県××郡××村×川瀬文吉となつ  
ている。一目見て、魚芳の父親らしいことが分つたが、何気なく封を切ると、内味まで父親の筆跡で、息子の死を通知して来た  
ものであつた。私が満洲にいたとばかり思つていた川瀬成吉は、私の妻より五カ月前に既にこの世を去つていたのである。

私をはじめて魚芳を見たのは十二年前のこと、私達が千葉の借家へ移つた時のことである。私たちがそこへ越した、その  
日、彼は早速顔をのぞけ、それから殆ど毎日註文を取りに立寄つた。大概朝のうち註文を取つてまわり、夕方自転車で魚を  
配達するのであつたが、どうかすると何かの都合で、日に二三度顔を現わすこともあつた。そういう時も彼は気軽に一里あまり  
の路を自転車で何度も往復した。私の妻は毎日顔を逢わせているので、時々、彼のことを私に語るのであつたが、まだ私は何の  
興味も関心も持たなかつたし、殆ど碌に顔も知っていなかつた。

20 私がほんとうに魚芳の小僧を見たのは、それから一年後のことと云いっている。ある日、私達は隣家の細君と一緒にブラブラと千葉海岸の方へ散歩していた。すると、向むかひの青々とした草原の径みちをゴムの長靴をひきずり、自転車を脇に押しやりながら、ぶらぶらやって来る青年があった。私達の姿を認めると、いかにも懐なつかしげに帽子をとって、挨拶をした。

「魚芳さんはこの辺までやって来るの」と隣家の細君は訊たずねた。

「ハア」と彼はこの一寸ちよつとした逢遭ほうそうを、いかにも愉たのしげにニコニコしているのであった。やがて、彼の姿が遠ざかって行くと、隣家の細君は、

25 「ほんとに、あの人は顔だけ見たら、まるで良家のお坊ちゃんのようにですね」と嘆なげじた。その頃から私はかすかに魚芳に興味を持つようになっていた。

その頃——と云つても隣家の細君が魚芳をほめた時から、もう一年は隔へだたっていたが、——私の家に宿なし犬が居ゐついて、表(注4)の露次でいつも寝そべっていた。褐色の毛並けなみをした、その懶惰らんだな雌犬は魚芳のゴム靴の音をきくと、のそのそと立上たちあがって、鼻さきもちあを持ち上げながら自転車の後について歩く。何となく魚芳はその犬に対しても愛嬌あいきようを示すような身振みぶりであった。彼がやって来ると、この露次は急に賑にぎやかになり、細君や子供たちが一頻ひとしきり陽気に騒ぐのであったが、ふと、その騒ぎも少し鎮しずまった頃、窓の方から向を見ると、魚芳は木箱の中から魚の頭とりだを取り出して犬に与えているのであった。そこへ、もう一人雑魚売りの爺じいさんが天秤てんびんぼう棒を担いでやって来る。魚芳のおとなしい物腰ものこしに対して、この爺さんの方は威勢いせいのいい商人であった。そうするとまた露次は賑にぎやかになり、爺さんの忙いそしげな庖ほうちよう丁の音や、魚芳の滑らかな声こゑが暫しばりくつづくのであった。——こうした、のんびりした情景はほとんど毎日繰返くりかえされていたし、ずっと続いてゆくもののおもわれた。だが、日華事変(注5)の頃から少しずつ変かわって行くのであった。

35 私の家は露次の方から三尺幅(注6)の空地を廻まわると、台所に行かれるようになっていたが、そして、台所の前にもやはり三尺幅の空地があったが、そこへ毎日、八百屋、魚芳をはじめ、いろいろな御用(注7)間がやって来る。台所の障子一重を隔へてた六畳が私の書齋に

なっていたので、御用聞と妻との話すことは手にとるように聞える。私はぼんやりと彼等の会話に耳をかたむけることがあった。ある日も、それは南風が吹き荒んでものを考えるには明るすぎる、散漫な午後であったが、米屋の小僧と魚芳と妻との三人が台所で賑やかに談笑していた。そのうちに彼等の話題は教練のことに移って行った。二人とも青年訓練所へ通っているらしく、その台所前の狭い空地で、魚芳たちは「になえつつ」の姿勢を実演して、**ア** 興じ合っているのであった。二人とも来年入営する筈であったので、兵隊の姿勢を身につけようとして陽気に騒ぎ合っているのだ。その恰好がおかしいので私の妻は笑いこけていた。だが、**B** 何か笑いきれないものが、目に見えないところに残されているようでもあった。台所へ姿を現していた御用聞のうちでは、八百屋がまず召集され、つづいて雑貨屋の小僧が、これは海軍志願兵になって行ってしまった。それから、豆腐屋の若衆がある日、赤あかだすき襷(注11)をして、台所に立寄り忙しげに別れを告げて行った。

45 目に見えない憂鬱の影はだんだん濃くなっていったようだ。が、魚芳は相変らず元気で小豆に立働いた。妻が私の着古しのシャツなどを与えると、大喜びで彼はそんなものも早速身に着けるのであった。朝は暗いうちから市場へ行き、夜は皆が寝静まる時まで板場で働く、そんな内幕も妻に語るようになった。料理の骨が憶えたくて堪らないので、教えを乞うと、親方は庖丁を(注12)使いながら彼の方を見やり、「黙って見ている」と、ただ、そうつぎや呟くのだそうだ。鞠躬きつきゆうじよ如として勤勉に立働く魚芳は、もしかすると、その家の養子にされるのではあるまいか、と私の妻は臆測もした。ある時も魚芳は私の妻に、——あなたとそっくりの写真がありますよ。それが主人のかみさんの妹なのですが、と大発見をしたように告げるのであった。

50 冬になると、魚芳は鶉ひよどりを持って来て呉れた。彼の店の裏に畑があって、そこへ毎朝沢山小鳥が集まるので、釣針つりに蚯蚓みみずを附けたものを木の枝に吊つるしておく、小鳥は簡単に獲れる。餌は前の晩しつらえておくと、霜の朝、小鳥は木の枝に動かなくなっている——この手柄話を妻はひどく面白がったし、私も好きな小鳥が食べられるので喜んだ。すると、魚芳は殆ど毎日小鳥を獲ってはせつせと私のところへ持って来る。夕方になると台所に彼の弾んだ声聞きこえるのだった。——この頃が彼にとっては一番愉快だった時代かもしれない。その後戦地へ赴いた彼に妻が思い出を書いてやると、「帰って来たら又幾羽でも鶉ひよどりを獲つ

て差上げます」と何かまだ弾む気持ちをつたえるような返事であった。

翌年春、魚芳は入営し、やがて満洲の方から便りを寄越すようになった。その年の秋から私の妻は発病し療養生活を送るようになったが、妻は枕頭で女中を指図して慰問の小包を作らせ魚芳に送ったりした。温かそうな毛の帽子を着た軍服姿の写真が満洲から送って来た。きつと魚芳はみんなに可愛がられているに違いない。炊事も出来るし、あの気性では誰からも(イ)重宝がられるだろう、と妻は時折噂をした。妻の病気は二年三年と長びいていたが、そのうちに、魚芳は北支から便りを寄越すようになった。もう程なく除隊になるから帰ったらよろしくお願いする、とあった。魚芳はまた帰って来て魚屋が出来ると思っているのかしら……と病妻は心細げに嘆息した。一しきり台所を賑わしていた御用聞きたちの和やかな声ももう聞かれなかったし、世の中はいよいよ兇悪な貌を露出している頃であった。千葉名産の蛤の缶詰を送ってやると、大喜びで、千葉へ帰って来る日をしたのしみにしている礼状が来た。年の暮、新潟の方から梨の箱が届いた。差出人は川瀬成吉とあった。それから間もなく除隊になった挨拶状が届いた。魚芳が千葉へ訪れて来たのは、その翌年であった。

その頃女中を傭えなかったので、妻は寝たり起きたりの身体で台所をやっていたが、ある日、台所の裏口へ軍服姿の川瀬成吉がふらりと現れたのだ。彼はきちんと立ったまま、ニコニコしていた。久振りではあるし、私も頻りに上ってゆっくりして行けとすすめたのだが、彼はかしまったまま、台所のところの鬨から一歩も内へ這入ろうとしないのであった。「何になつたの」と、軍隊のことはよく分らない私達が訊ねると、「兵長になりました」と嬉しげに答え、これからまだ魚芳へ行くのだからと、倉皇として立去つたのである。

そして、それきり彼は訪ねて来なかった。あれほど千葉へ帰る日をたのしみにしていた彼はそれから間もなく満洲の方へ行つてしまった。だが、私は彼が千葉を立去る前に街の歯医者でちらとその姿を見たのであった。恰度私がそこで順番を待っていると、後から入って来た軍服の青年が歯医者者に挨拶をした。「ほう、立派になったね」と老人の医者は懐しげに肯いた。やがて、私が治療室の方へ行きその椅子に腰を下すと、間もなく、後からやって来たその青年も助手の方の椅子に腰を下した。「これは仮りにこうしておきますから、また郷里の方でゆっくりお治しなさい」その青年の手当はすぐ終つたらしく、助手は「川瀬成吉

さんでしたね」と、机のところのカードに彼の名を記入する様子であった。それまで何となく重苦しい気分に沈んでいた私はその名をきいて、はっとしたが、その時にはもう彼は階段を降りてゆくところだった。

それから二三月して、<sup>(注18)</sup>新京の方から便りが来た。<sup>(注19)</sup>川瀬成吉は満洲の吏員に就職したらしかった。あれほど内地を恋しがっていた魚芳も、一度帰ってみて、すっかり失望してしまったのであろう。私の妻は日々に募ってゆく生活難を書いてやった。すると満洲から返事が来た。「大根一本が五十銭、内地の暮しは何のことやらわかりません。おそろしいことですね——こんな一節があった。しかしこれが最後の消息であった。その後私の妻の病気は悪化し、もう手紙を認めることも出来なかったが、満洲の方からも音沙汰なかった。

85 その文面によれば、彼は死ぬる一週間前に郷里に辿りついているのである。「兼て彼の地に於て病を得、五月一日帰郷、五月八日、永眠仕候」と、その手紙は悲痛を押しつぶすような調子ではあるが、それだけに、侘しいものの姿が、一そう大きく浮び上って来る。

90 あんな気性では皆から可愛がられるだろうと、よく妻は云っていたが、善良なだけに、彼は周囲から過重な仕事を押しつけられ、悪い環境や機構の中を堪え忍んで行ったのではあるまいか。親方から庖丁の使い方は教えて貰えなくても、辛棒した魚芳、久振りに訪ねて来ても、台所の鬨から奥へは遠慮して這入ろうともしない魚芳。郷里から軍服を着て千葉を訪れ、<sup>(ウ)</sup>晴れがましく顧客の齒医者で手当てしてもらう青年。そして、遂に病軀をかかえ、とぼとぼと遠国から帰って来る男。……ぎりぎりのところまで堪えて、郷里に死にに還った男。私は何となしに、また魯迅の作品の暗い翳を思い浮べるのであった。

終戦後、私は郷里にただ死にに帰って行くらしい疲れはてた青年の姿を再三、汽車の中で見かけることがあった。……

(注)

- 1 彼は早速顔をのぞけ——「彼は早速顔をのぞかせ」の意。
- 2 一里——里は長さの単位。一里は約三・九キロメートル。
- 3 逢遭——出会い。
- 4 露次——ここでは、家と家との間の細い通路。「露地」「路地」などとも表記される。
- 5 日華事変——日中戦争。当時の日本での呼称。
- 6 三尺——尺は長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。
- 7 御用聞——得意先を回って注文を聞く人。
- 8 教練——軍事上の訓練。
- 9 になえつつ——銃を肩にかけること。また、その姿勢をさせるためにかけた号令でもあった。
- 10 入営——兵務につくため、軍の宿舎に入ること。
- 11 赤襪——ここでは、召集令状を受けて軍隊に行く人がかけた赤いたすき。
- 12 鞠躬如として——身をかがめてかしこまって。
- 13 女中——ここでは、一般家庭に雇われて家事をする女性。当時の呼称。
- 14 写真が満洲から送って来た。——「写真が満洲から送られて来た。」の意。
- 15 北支——中国北部。当時の日本での呼称。
- 16 除隊——現役兵が服務解除とともに予備役(必要に応じて召集される兵役)に編入されて帰郷すること。
- 17 倉皇として——急いで。
- 18 新京——現在の中国吉林省長春市。いわゆる「満洲国」の首都とされた。
- 19 吏員——役所の職員。
- 20 魯迅——中国の作家(一八八一—一九三六)。本文より前の部分で魯迅の作品に関する言及がある。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は **12** ～ **14**。

(ア) 興じ合っている

**12**

- ① 互いに面白がっている
- ② 負けまいと競っている
- ③ それぞれが興奮している
- ④ わけもなくふざけている
- ⑤ 相手とともに練習している

(イ) 重宝がられる

**13**

- ① 頼みやすく思われ使われる
- ② 親しみを込めて扱われる
- ③ 一目置かれて尊ばれる
- ④ 思いのままに利用される
- ⑤ 価値が低いと見なされる

(ウ) 晴れがましく

**14**

- ① 何の疑いもなく
- ② 人目を気にしつつ
- ③ 心の底から喜んで
- ④ 誇らしく堂々と
- ⑤ すがすがしい表情で

問2

傍線部A「そうした、暗い、望みのない明け暮れにも、私は凝と蹲ったまま、妻と一緒にすごした月日を回想することが多かった。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は

15。

- ① 生命の危機を感じさせる事態が続けざまに起こり恐怖にかられた「私」は、妻との思い出に逃避し安息を感じていた。
- ② 身近な人々の相次ぐ死に打ちのめされた「私」は、やがて妻との生活も思い出せなくなるのではないかとおびえていた。
- ③ 世の中の成り行きに閉塞感を覚えていた「私」は、妻と暮らした記憶によって生活への意欲を取り戻そうとしていた。
- ④ 戦局の悪化に伴って災いが次々に降りかかる状況を顧みず、「私」は亡き妻への思いにとらわれ続けていた。
- ⑤ 思うような連絡すら望めない状況にあっても、「私」は妻を思い出させるかつての交友関係にこだわり続けていた。

問3

傍線部B「何か笑いきれないものが、目に見えないところに残されているようでもあった」とあるが、「私」がこのとき推測

した妻の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 魚芳たちが「になえつつ」を練習する様子に気のはやりがあらわで、そうした態度で軍務につくならば、彼らは生きて帰れないのではと不安がっている。
- ② 皆で明るく振る舞ってはいても、魚芳たちは「になえつつ」の練習をしているのであり、以前の平穏な日々が終わりつつあることを実感している。
- ③ 「になえつつ」の練習をしあう様子に、魚芳たちがいだけく期待を感じ取りつつも、商売人として一人前になれなかった境遇にあわれみを覚えている。
- ④ 魚芳たちは熱心に練習してはいるものの、「になえつつ」の姿勢すらうまくできていないため、軍務にいたら苦勞するのではと懸念している。
- ⑤ 魚芳たちは将来の不安を紛らそうとして、騒ぎながら「になえつつ」の練習をしているのだが、そのふざけ方がやや度を越していると感じている。

問4 傍線部C「彼はかしくまったまま、台所のところの闘から一步も内へ這入ろうとしないのであった」とあるが、魚芳は「私達」に対してどのような態度で接しようとしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 戦時色が強まりつつある時期に、連絡せずに「私達」の家を訪問するのは兵長にふさわしくない行動だと気づき、改めて礼儀を重んじようとしている。
- ② 再び魚屋で仕事ができると思ってたつての勤め先に向かう途中に立ち寄ったので、台所から上がれという「私達」の勧めを丁重に断ろうとしている。
- ③ 「私達」に千葉に戻るのを楽しみだと言いつつ、除隊後新潟に帰郷したまま連絡を怠り、すぐに訪れなかったことに対する後ろめたさを隠そうとしている。
- ④ 「私達」と手紙で近況を報告しあっていたが、予想以上に病状が悪化している「妻」の姿を目の当たりにして驚き、これ以上迷惑をかけないようにしている。
- ⑤ 除隊後に軍服姿で「私達」を訪ね、姿勢を正して笑顔で対面しているが、かつて御用聞きと得意先であった間柄を今でもわきまえようとしている。

問5 本文中には「私」や「妻」あての手紙がいくつか登場する。それぞれの手紙を読むことをきっかけとして、「私」の感情はどの

ように動いていったか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 妻の死亡通知に対する悔み状(2行目)を読んで、紋切型の文面からごく少数の知己とさえ妻の死の悲しみを共有しえないことを知った。その後、満洲にいる魚芳から返信が来ないという些細なことが気掛かりになる。やがて魚芳とも悲しみを分かち合えないのではないかと悲観的な気持ちが強まった。

② 川瀬丈吉からの封書(10行目、84行目)を読んで、川瀬成吉が帰郷の一週間後に死亡していたことを知った。生前の魚芳との交流や彼の人柄を思い浮かべ、彼の死にやりきれなさを覚えていく。終戦後、汽車でしばしば見かけた疲弊して帰郷する青年の姿に、短い人生を終えた魚芳が重なって見えた。

③ 満洲から届いた便り(57行目)を読んで、魚芳が入営したことを知った。妻が送った防寒用の毛の帽子をかぶる魚芳の写真が届き(58行目)、新たな環境になじんだ様子を知る。だが、すぐに赴任先が変わったので、周囲に溶け込めず立場が悪くなったのではないかと心配になった。

④ 北支から届いた便り(60行目)を読んで、魚芳がもうすぐ除隊になることを知った。そこには千葉に戻って魚屋で働くことを楽しみにしているから帰ったらよろしくお願いするとあった。この言葉から、時局を顧みない楽天的な傾向が魚芳たちの世代に浸透しているような感覚にとらわれていった。

⑤ 新京から届いた便り(78行目)を読んで、川瀬成吉が満洲の吏員に就職したらしいことを知った。妻が内地での生活難を訴えると、それに対してまるで他人事のように語る返事が届いた。あれほど内地を恋しがっていたのに、役所に勤めた途端に内地への失望感を高めたことに不満を覚えた。

問6 この文章の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19

20

- ① 1行目「魚芳」は川瀬成吉を指し、18行目の「魚芳」は魚屋の名前であることから、川瀬成吉が、彼の働いている店の名前で呼ばれている状況が推定できるように書かれている。
- ② 1行目「私は一九四四年の秋に妻を喪った」、13行目「私が始めて魚芳を見たのは十二年前のこと」のように、要所で時を示し、いくつかの時点を行き来しつつ記述していることがわかるようにしている。
- ③ 18行目「ブラブラと」、22行目「ニコニコ」、27行目「のそのそと」、90行目「とぼとぼ」と、擬態語を用いて、人物や動物の様子をユーモラスに描いている。
- ④ 28～30行目に記された宿なし犬との関わりや51～56行目の鴨をめぐるエピソードを提示することで、魚芳の人柄を浮き彫りにしている。
- ⑤ 38行目「南風が吹き荒んでものを考えるには明るすぎる」という部分は、「午後」を修飾し、思索に適さない様子を印象的に描写している。
- ⑥ 57行目「私の妻は発病し」、60行目「妻の病気は二年三年と長びいていたが」、62行目「病妻」というように、妻の状況を断片的に示し、「私」の生活が次第に厳しくなっていたことを表している。